



TITLE:

コーラ修道院聖堂におけるキリスト
教絵画による空間構成(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

猪股, 圭佑

CITATION:

猪股, 圭佑. コーラ修道院聖堂におけるキリスト教絵画による空間構成.
京都大学, 2018, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2018-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13204>

RIGHT:

京都大学	博士（工学）	氏名	猪股 圭佑
論文題目	コーラ修道院聖堂におけるキリスト教絵画による空間構成		
<p>本論文は、コンスタンティヌポリス（現イスタンブル）に現存するコーラ修道院聖堂を対象に、その絵画によって意味付けされた空間構成の特徴を明らかにするものである。本文は4章からなり、既往研究における個々の絵画についての図像解釈や複数の絵画による装飾プログラムをふまえ、部分的な建築と絵画との関係の検討に留まらず、建築空間全体に着目し、絵画を含めた宗教的意味空間の構成を詳細に分析し考察している。</p> <p>序では、まず、一般的にビザンティン聖堂建築では建築と絵画が不可分の関係にあり、絵画の主題とその配置が、個々の図像も含め、すべて空間を構成する重要な要素であることが確認されている。さらに、モザイクやフレスコは単純な装飾ではなく、高さや奥行き物理量とともに、各部位のオーダーも空間設計上の意図を持って計画されていることから、その空間構成を分析するためには、建築物だけでなくそこに描かれた絵画の意味も含めて検討する必要があることが説明される。そのうえで、本論文ではコーラ修道院聖堂における絵画と建築による意味空間の構成の特徴を明らかにすることが目的に設定され、コーラ修道院の概要と研究方法、関係する既往研究、章構成が示されている。</p> <p>第1章では、ビザンティン聖堂の建築と絵画を概観し、とくに本論文で対象とするコーラ修道院聖堂の成立に至る事跡を整理している。コーラ修道院聖堂はビザンティン帝国の首都に建設された聖堂建築である。それは儀礼を行う機能的な空間でありながら、聖堂の西には二重のナルテクス、南には葬礼用礼拝堂であるパレクレシオンが増築され、献堂者達の墓所が設けられた。そのため、非整形で複雑な平面、断面を持ち、同様に複雑な絵画の配置によって重層的に意味づけられた空間を持つビザンティン聖堂建築の典型の一つとなっている。その絵画のモチーフや構成について既往研究による知見を整理し、イエスが神であり人であるとする〈両性論〉がしばしば絵画の主題とされること、また〈神としてのキリスト〉を頂点に、ドームから下に順次三段階の高さに絵画のモチーフが配置される〈三段階理論〉が論じられていることを紹介し、これがおおよそコーラ修道院聖堂にも当てはまることを示している。</p> <p>第2章では、コーラ修道院聖堂のキリスト教絵画に描かれた〈山〉について、人物との関係に着目してその類型を抽出し、それら類型を分析し、その意味を考察している。分析に当たっては各絵画の構成要素を列挙し、説明図を作成して場面区分を行い、次に人物の背景に着目して模式図を作成している。これらの分析図にもとづき、場面区分、構成要素および人物の背景から、〈人物の横にある山〉〈人物を縁取る山〉〈人物の横にある山+人物を縁取る山〉という三種類の〈山〉の類型を抽出している。そしてそれぞれの類型について、〈人物の横にある山〉では、山は場面が街の外の危険な世界であることを示していること、〈人物を縁取る山〉では、山の稜線で囲われた領域が特別な意味を持つ場所として表現されていること、〈人物の横にある山+人物を縁取る山〉では、前二者の特徴に加えて、山は現実の世界と神の世界を区分しつつ、両者を繋ぐ場所として描かれていたことを明らかにしている。</p> <p>第3章では、コーラ修道院聖堂における外ナルテクスの南出入口から内ナルテクスへ</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	猪股 圭佑
<p>至る空間、およびそこに描かれた複数の絵画を対象に、断面展開図や内部合成写真を作成し、絵画の主題および配置による空間構成の分析を行っている。その結果、南出入口を入ったところに描かれた「マギの礼拝」は、聖母マリアにより〈受肉〉を象徴する内ナルテクスへと導いており、コーラ修道院聖堂の外ナルテクスの南出入口は外部から内ナルテクスへの動線を意識した南北軸線上に位置していることが見いだされている。また、内ナルテクスの南ドームには治癒の奇跡によって人々を救済する〈神としてのキリスト〉が描かれており、キリストがドームの表す神の世界から救済を願う信者のいる地上の世界に下りてきたことを表し、内ナルテクスの北ドームには象徴的に〈受肉〉を示す聖母マリアが繰り返し描かれ、〈人としてのキリスト〉が表現され、聖母マリアの執り成しをもってキリストによる救済を希求する信者の願いが強調されている。このことから、外ナルテクスの南出入口から内ナルテクスへ至る連続する空間は聖母マリアを象徴し、〈キリストの両性〉が表現され、建築と絵画が重なりあった立体的な宗教的空間が構成されていることを指摘している。</p> <p>第4章では、コーラ修道院聖堂におけるパレクレシオンの空間構成の特徴を墓室と絵画との関係に着目して明らかにすることを目的として、その空間全体を図式化し、絵画の主題および配置の分析を行っている。パレクレシオンには、旧約聖書の物語が南壁の「契約の箱の奉納」から時計回りに始まり、最後の北壁の「燃える芝」に至るまで配置されている。それらは聖母マリアの予型であり、ドームでは〈聖母マリアによる執り成し〉が表現される。地上の世界において〈キリストによる救済〉を信じつつ、ドーム下北壁の墓室に埋葬されたであろう14世紀の献堂者テオドロス・メトキティスの魂は、絵画の中の天使によって導かれて「最後の審判」へと臨み、南壁に描かれた地獄へ落ちることなく、選民とともに北壁に描かれた「天国」の入口へと進む。つまり、メトキティスの墓室は、旧約聖書の物語による聖母マリアの予型と〈聖母マリアによる執り成し〉が表現されたドームの下で、聖堂の中心であるナオスへ通じる出入口に隣接し、さらに「最後の審判」を経て「天国」そして「復活」へと繋がる位置にある。第3章で〈南出入口から内ナルテクスへ至る連続する空間〉が指摘されたが、このようにパレクレシオンにおいても同様に、南北の軸線が重要な意味を持つことが明らかにされた。さらに、聖母マリアの予型の物語のクライマックスである「燃える芝の前のモーセ」がほとんど同じ構図で2箇所連続すること、「天国へ進む選民」における通常と逆の進行方向、「最後の審判」における「天国」や聖母マリア、救済される男がいずれも北側に描かれたこと、これらすべてが北西の墓室の配置と関係していることから、既往研究では明確にされてこなかった献堂者の墓室の配置の妥当性が検証された。</p> <p>結では、本論文で得られた成果について要約し、コーラ修道院聖堂において、増改築によって生じた非整形で複雑な建築空間と配置された多数の絵画が、互いに関係し合っ</p>			
<p>て生み出す流動的な宗教的意味空間の構成を明らかにできたとしている。</p>			

本論文は、コーラ修道院聖堂を事例として、建築と絵画が総合的に生み出す宗教的な意味空間の解明を目指したものであり、建築空間と絵画空間の重なりを記述するために様々な図法が考案された。そして、墓室や絵画との関係に着目して空間構成の特徴が詳細に分析され、絵画によって意味づけられた空間構成の特徴が明らかにされた。得られた主な成果は次のとおりである。

1. ビザンティンのキリスト教絵画に描かれた〈山〉について論じた既往研究が見られない中、絵画の構図を分析し、街の外の危険な世界を象徴する〈人物の横にある山〉、枠づけされた特別な意味を持つ場所を示す〈人物を縁取る山〉、両者の特徴とともに神の世界へと繋がる場所を示す〈人物の横にある山＋人物を縁取る山〉の三つの類型が抽出された。

2. 聖堂南出入口は外部から内ナルテクスへの動線を意識した配置となっていることが明らかにされた。その根拠として、南出入口の「マギの礼拝」の配置には内ナルテクスとの意味的な繋がりがあることが検証された。また、内ナルテクス南ドームでは〈神としてのキリスト〉が表現されていること、同北ドームでは〈人としてのキリスト〉が表現されていることから、南出入口から内ナルテクスへ至る連続する空間では、〈キリストの両性〉を表現する建築的空間が絵画の配置によって形成されたことが証示された。

3. 献堂者の墓室の配置は、たんに平面計画上、ドームの南北中心線から外れた位置にあるわけではなく、〈予型〉の物語に象徴される聖母マリアとの関係、「最後の審判」における「天国」への近さ、聖堂の中心であるナオスとの結びつき、これらにより妥当であることが検証された。さらに、パレクレシオンにおいても南北の軸線が重要な意味を持つこと、「燃える芝の前のモーセ」がほとんど同じ構図で2箇所連続すること、「天国へ進む選民」における通常と逆の進行方向、「天国」や聖母マリア、救済される男がいずれも北側に描かれたことを指摘し、これらすべてが北西の墓室の配置と関係していることが明らかにされた。

以上のように、本論文は、後期ビザンティン建築の傑作の一つとされるコーラ修道院聖堂を対象に、数多くの既往論文を渉猟し、内部壁面に描かれた個々の絵画の主題とそれらの配置の統合的考察から、空間の意味の解釈を試みたものである。その成果として、コーラ修道院聖堂では聖堂建築の空間構成と絵画の意味や配置、および献堂者の意図が密接に結びついていることを詳細に解明した。提示された図は分析や論述のためにきわめて綿密に考案されたものである。以上のとおり、本論文が学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年6月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。